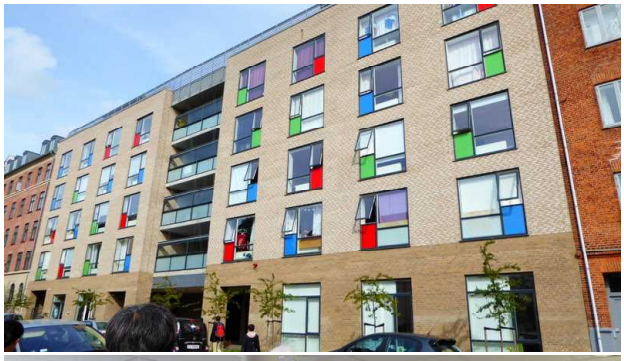
報告７　デンマーク・コペンハーゲン

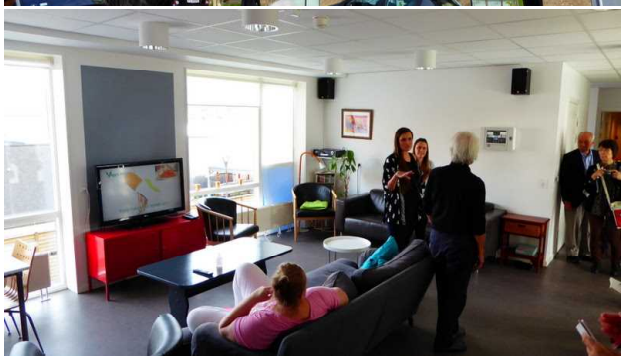
街中のグループホーム

街中にある知的障害者グループホーム「リーバス・レンテメステルヴェイ」を訪問。グループホームが面した通りの名前だそうだ。

設立したのはデンマーク知的障害者親の会（LEV）。あのバンク-ミケルセンが社会省の役人だった頃、この親の会の願いに共感し、そのとりくみを手伝って、社会省に「知的障害者に関する福祉政策委員会」が設置される。15 人の委員会には親の会から２人、医師７人、残りが役人で彼が委員長に。そしてノーマライゼーションを推進する 1959 年法を制定。この親の会は、ロビー活動だけでなく、財政活動も徹底している。

グループホームを希望する障害者の各自治体ごとの数は親の会がほぼ把握している。親の会は、そのニーズをみながら住宅を「建築」し、それを自治体は「借り上げる」。需要と供給、そして確実な「借り上げ」主がいる状況は、強力な財政活動だ。





◆

OT のマリー・ヤコブセンさんの案内。ここは共有スペースをやや広くとっているので、それぞれの部屋は２部屋あっておおよそ 50 平米くらい。１フロアー６戸で 24 戸のアパートがある。

朝、それぞれが起きる。必要があればスタッフが手伝う。日中は、それぞれ作業所などへ通っていて、部屋にはいない。夕食は、１階にあるカフェで済ませたり、各自カフェの食事を持ち込んだり。土日は自由に家族や恋人に会ったり、そうしたことが出来ない人はスタッフといっしょにチボリ（遊園地）に行ったりする。

２階と３階を「チーム１（高齢の人）」、４階５階を「チーム２（若者）」としている。スタッフは１チームに６人。日中２人、準夜２人、夜勤１人体制。

家賃と食費で月約 10000DKK。住宅手当は国から支給されるので障害者年金（早期年金）で足りる。65 歳からは老齢年金で額面は少なくなる。手持ちのお金が少なくなる。

62 歳だというサーンさんが、「いつもは作業所に通ってるけど、今日はいるから部屋のなか見てく？」というので、喜んで部屋のなかを見せていただいた。

「サーンさんはどんな経過でここに来たんですか？」と聞くと、スタッフは、「２年前にここに引っ越しました。それ以前には何カ所かのグループホームにいたようですが、詳しくはわかりません」

最高齢は 80 歳。認知症になると高齢者住宅に移ることになるけど、ここは「終の棲家」なのだ。

（薗部英夫）

▼グループホームのあった街角は、移民が多いエリア。「お祈り済みの肉」の肉屋もあれば、そうでない肉屋もある。市バスに乗って移動していると多様な民族の街を実感。車内でわたしの隣に座ったのは、アフリカ系の大きい男、アラブ系の革ジャンのおじさん、最後は、デンマーク生まれとおもわれるおばあさま。「ニーハウ？」。じゃなくて「ヤーパン」です。しかし事件は起こっていた。「あれ？スマホ落としたのかな」とメンバーの一人。通訳の田口さん曰く「それはきっと、すられたのでしょう」(^^;)。